

Program プログラム

ロッシーニ

Gioacchino Rossini

セビリアの理髪師 序曲

Il Barbiere di Siviglia Overture

ブラームス

Johannes Brahms

ハイドンの主題による変奏曲 作品56a
Variations on a Theme of Haydn Op.56a

≡≡≡≡≡≡≡≡ 休憩 Intermission ≡≡≡≡≡≡≡≡

ドヴォルザーク

Anton Dvořák

交響曲第8番 ト長調 作品88
Symphony No.8 in G major Op.88

曲目のこと

尾崎 正峰

G. ロッシーニ (1792～1868) 歌劇『セヴィリアの理髪師』序曲

ロッシーニという名前を聞いたとき、みなさんはどんなイメージをもたれるでしょうか。解説子の場合、大学生の頃は、フランス語(彼はイタリア人ですが)のノンシャラン(nonchalant:呑気、無頓着)という言葉が一番似合っている、どちらかという「軽め」の作曲家というイメージでした。その後、少しは知恵が付いてきましたし、世界的に「ロッシーニ・ルネサンス」として再評価が進んできていることもあり、今では音楽史上でも稀有な天才であったととらえるようになってきました。

「弦楽のためのソナタ」全6曲を弱冠12歳で作曲、はたまた、16歳で最初のオペラを書き、18歳で第2作目が劇場初演されて以来数多くの作品を世に送り出す等々、モーツァルトばりの天賦の才を示しました。オペラ作曲家としての名声を確立した時期のパリ訪問(1823年)と同じ頃出版されたスタンダールの『ロッシーニ伝』(邦訳は、みすず書房刊)では「ナポレオンは死んだが、別の男が現れた」と絶賛されています。

こうした作曲家としての顔に加えて、ある意味、型破りともいえる生き方が音楽史上の稀有な存在として彼が語られる所以でしょう。何が型破りかといえば、彼は大作『ウィリアム・テル』を作曲し

た1829年、わずか37歳でオペラの作曲から離れ、名曲『スターバト・マーテル』(1842年)を除けば創作活動から身を引いた生活を送ります。歌劇の筆を折ったときの言葉がまたふるっています。「向こうから来ていた音符を追いかけていくのが億劫になった」。やはり、天才の言うことは違います。その後は、食通でならした彼は料理の道にも踏み込みましたが、その名残はフランス料理によくある「…のロッシーニ風」という言葉からうかがうことができます(これらロッシーニの生涯をうかがうには、水谷彰良『ロッシーニと料理』透土社、などをどうぞ)。

歌劇『セヴィリアの理髪師』は、1816年、24歳の時の作品で、ヨーロッパ中にその名声をとどろかすことになった名作です。深窓の令嬢ロジーナをめぐるアルマヴィーヴァ伯爵と医師バルトロによる恋のさや当てに、狂言回しとしてのフィガロが絶妙に絡みます。この歌劇の原作は、フランスのボーマルシェによる同名の戯曲です。『フィガロの結婚』と『罪ある母』を合わせフィガロ3部作といわれますが、『セヴィリアの理髪師』が第1作で、2作目の『フィガロの結婚』はその後日談にあたります—この流れをつかんでおかないと、たとえばモーツ

ァルトの歌劇『フィガロの結婚』の中で、伯爵夫人となったロジーナが夫アルマヴィーヴァ伯爵の不実を嘆く第3幕の名アリア「楽しい思い出はどこへ」の意味が半分も伝わらないことになります。

啓蒙主義の立場から、貴族など権力者に翻弄されながらも、その無能さを嘲笑し、最後にはその鼻をあかしてしまう知恵と行動力を持った庶民の姿をフィガロに表象させたボーマルシェの戯曲『セヴィリアの理髪師』の初演は1775年、続く『フィガロの結婚』は1784年。ほどなくフランス革命を迎える当時の政治・社会状況が折り重なる中で、階級社会批判という鋭い切っ先がこれらの作品に埋め込まれることになったといえます。当時の貴族たちは、自分たちの喉元に突きつけられた刃の鋭さに気づかずに、戯曲の中でフィガロが繰り出す辛辣ながらも小気味よい台詞に熱中したのは何とも皮肉な図であるといえます。もっとも、ボーマルシェ自身もフランス革命に対しては穏健な改革派という立場でした。その意味で、社会におけるこれらの作品の受容は、彼自身の思惑と異なる、ある意味、意図せざるものにまで広がったといえるでしょう（この点をめぐって、フランス文学の大家、辰野隆（たつの・ゆたか）氏の古典的名著『ボーマルシェとフランス革命』（筑摩書房）などをご覧くださいのも一興かもしれません。また、『ボーマルシェーフィガロの誕生』という彼の半生を描いたフランス映画もあります。ちなみに、辰野氏は、『フィガロの結婚』の岩波文庫版の翻訳者であり、評論家小林秀雄の師匠等々、多彩な方です。その生涯の一端は、出口

裕弘『辰野隆一日仏の円形広場』新潮社、などでどうぞ。ついでながら、氏の父君は、現在、改修工事が進められている東京駅、それに日本銀行本店や国技館（初代）など数多くの建物の設計をした建築家辰野金吾氏です）。

さて、ロッシーニに話を戻しますと、『セヴィリアの理髪師』序曲の成り立ちの経緯を見ると「やはり、彼はノンシャランな男！」と思ってしまいます。この序曲は、もともと彼の別の歌劇『パルミーラのアウレリアーノ』（1813年）のために作曲されたものであり、しかも『イングランドの女王エリザベッタ』（1815年）にも流用されています。つまり同じ序曲が3つの違うオペラに使われたわけです。

この所業については、かのベートーヴェンとよく比較されます。ベートーヴェンが文字通り心血を注いだ歌劇『フィデリオ』。尋常ならざる周到さと執拗さ故に何度も改訂を重ねますが、彼は改訂のたびに新たに序曲を作曲しました（『レオノーレ』と題する序曲が第1番から第3番の3曲、そして『フィデリオ』序曲を合わせた4曲）。実はこの二人、実際に対面したことがあります。1822年、ロッシーニは自らの歌劇の上演のためにウィーン来訪の際、尊敬するベートーヴェンを訪問します。その時、ベートーヴェンは『セヴィリアの理髪師』を絶賛しつつ、「あなたはオペラ・ブッフア（喜歌劇）以外に手を出してはいけません」と述べたといわれます。

曲の使い回し、これには彼の性格的な面もあったといえますが、少しでもロッシーニの肩を持てば、台本ができあがっ

てくるのが遅かったため作曲の時間があまりにも短かったという事情もありました。結果として、この作品では序曲だけではなく、劇中のアリアの旋律もそれまでの彼の歌劇の各作品からの流用がいくつも行われ（全体の曲数の40%弱。なお、フィガロの有名なカヴァティーナ「俺は、町の何でも屋」は“新作”です）、わずか13日で仕上げてしまいました。

いずれにしても、戯曲『セヴィリアの理髪師』を題材にオペラを作曲した作曲

家の数は20世紀に至るまでに15を超えるといわれる中であって、ロシーニの作品は今なお世界中で演奏されるものです。二番煎じ（三番煎じ？）とはいえ、初演以来、人々の心をつかんで離さない極上のオペラの幕開けを告げるにふさわしい快活そのものの序曲。もちろん、我が大宮フィルの第31回定期演奏会の幕開けにもピッタリ！どうぞお楽しみ下さい。

（演奏時間：約7分）

J. ブラームス（1833～97） ハイドンの主題による変奏曲 作品56a

この作品は、1873年夏に作曲されました。作曲当時ハイドンの作品とされていた「管楽器のためのディヴェルティメント」（現在では、この作品はハイドンの手によるものではないとされています）第2楽章の主題をブラームスが得意とした変奏曲の形式に創り上げました。この作品が生み出される背景として、ブラームスがハイドンやモーツァルトなどの古典派やバロック音楽を敬愛し、とくに大バッハに心酔していたことがあげられます。

ブラームスは、まず2台のピアノによる4手用のヴァージョンを作品56bとして完成させた後、オーケストラ版へと歩を進めました。慎重居士であった彼ならではのことですが、眼前に立ちほだかるベートーヴェンの9曲の交響曲という秀峰の存在ゆえに、オーケストラ作品を世に問う場合、慎重の上にも慎重を期すことになったのでしょう。そして、この

作品の3年後、長年にわたって推敲を重ねてきた渾身の名曲、交響曲第1番が完成します。

さて、この時期のことをこれ以上書いてしまいますと、来年の交響曲第1番の解説のネタがなくなってしまうので、誠に勝手ではございますが、この辺で切り上げさせていただきます。続きを読みたい方は、ぜひ来年もお越し下さい（さりげなく宣伝。いや、わざとらしいか？）。

というわけで（「どういうわけだ！」と怒られそうですが）、ここでは少し趣向と観点を変えて、解説子の個人的な想い出と共に、この作品をめぐるひとくどりを。

先年、文化勲章を受章された吉田秀和氏の『世界の指揮者』（音楽之友社。現在は、ちくま文庫から増補改訂版が刊行）を高校生の時（もう30年以上前のこと！）に購入し、文字通り熟読しまし

た。作品や演奏家をめぐるさまざまな背景への目配り、作品に対する分析的な理解、名指揮者が紡ぐ演奏の多様性、それらが簡潔かつ独特の言い回しで綴られていました。思えば、「聞き比べ」と称して同じ作品の異なる演奏（レコード、CD）を何枚も何枚も、時には何十枚も買ってしまふ悪癖は、このときすり込まれたのかもしれませんが。現在までに幾度か読み返す機会がありましたが、読む側の変化と共に新しい発見や読み取り方ができるという意味で、解説子にとっての「古典」といえる著作です。

同書の中でブラームスのこの作品に関する叙述が特に印象に残りました（何故なのか、未だに分かりませんが）。曰く「およそ何百曲かに上る古今の管弦楽曲の名曲を洗いざらい数え上げる場合でも、管弦楽の変奏曲という題目では、抜きにして考えることのできないものである」、曰く「指揮者の力量をはかるのと同じように、管弦楽団の力を知る上にも、この曲は最適な作品」云々。そうした作品の数ある演奏（レコード）のうちでもっとも氏の評価が高かったのはジョージ・セル＝クリーヴランド管弦楽団でした。「水際立ってうまい」「これほど、欠陥のない演奏は、ほかになかった」「純粋に音楽的にいったら、これが最高の出来栄のレコード」等々の讃辞の言葉が並べられています。稀代の名ピアニスト・ホロヴィッツの初来日公演（1983年）での演奏を「ひびの入った骨董品」と評したほど舌鋒鋭い面をもたれている氏としては大絶賛といってよいと思います。

このセルの演奏の対極に位置づけら

れていたものがフルトヴェングラー＝ベルリン・フィルの演奏でした。第二次世界大戦の真っ直中、1943年12月のライブ録音のため、合奏の完璧度はセルほどではないし、実演故のハンディキャップもあるとしています。また、その音質の貧弱さを嘆いてもいます（技術の発達した現在ではこのフルトヴェングラーの演奏の復刻CDが各社から出されており、それぞれの特徴ある音質で楽しむことができます－前述の悪癖のため解説子の自宅には4種類（も）の復刻CDがあります－。音質の改善著しい復刻CDを聴いてみて氏の感想がどのように変わるのか？聞けるはずもないことですが聞いてみたいものです）。

しかし、それらの欠点の「すべてを補ってもあまりある」ものとして、第7変奏の後半、第一、第二ヴァイオリンがオクターヴのユニゾンで変ロ音から始まって2オクターヴあまり上昇し、ハ音に上がってから、また順次下りてくる箇所をあげています。少々長くなりますが、その部分を引用してみましょう。「この彼の演奏を一度でもきいて、しかも、それを忘れることのできる人がいたとすれば、その人はもう、よほど、どうかしているといわなければならないだろう。ただの音階の上昇と下降でありながら、こんなに燃えるようなものをもって上下する動きはあるものではない。しかもそれがあくまでもグラチオーソのシチリアーノの枠で前後左右をとりかこまれた中で生起するのである。きらきらと輝きながら燃え上がり、そうして力つきおりにくる一条の光！この中には、ロマンチック音楽のすべてがある。しかも、

これはあくまでもブラームスなのだ。」

吉田氏をしてここまで言わしめた演奏ですが、当時のベルリン・フィルの置かれていた状況がどんなものであったのか。2007年に制作された記録映画『帝国のオーケストラ (Reichsorchestra)』に収録された、当時の楽団員で存命中の2人をはじめ関係者の証言から見てみましょう。

ベルリン・フィルは、ナチスのプロパガンダ政策の渦中にあり、戦時中を通して活動を続けることができた唯一のオーケストラでした。そのため国立歌劇場のメンバーですら軍隊に徴用されたのに対して、ベルリン・フィルの楽団員は兵役を免れていました。その一方で、ユダヤ系の楽員は亡命など楽団を去らなければなりません。第二次世界大戦の開戦以後、戦況は変化し、ナチスの敗色濃厚となってきました。上記のライブ録音のわずか1ヶ月後、1944年1月の空爆で本拠地のフィルハーモニー・ザールが焼失しました。それでも演奏会は会場を変えて開催され、空襲警報で演奏が中断されながらも活動は続けられました。こうした極限状況において、演奏する側、そして、それを聴くベルリン市民は音楽に何を見出していたのでしょうか。もはや想像の域を越えることのできない位置に私たちはいるわけですが、あらためて演奏を聴いてみると、フルトヴェングラーの演奏を評する際によく使われる「凄絶」のみならず、「精神の安息」へと誘う「癒し」が伏在していると思うのは読み込みのしすぎでしょうか。ともあれ、さまざまな思いを喚起させる演奏ですが、作品の持つ力との相互作用

で誘発された歴史的記録ではないかと思えます。

最後に、一応、曲目解説らしいスタイルで締めたいと思います。

主題 古い巡礼の歌といわれる「聖アントニウスのコラル」のテーマがオーボエをはじめとする各管楽器によって提示されます。

第1変奏 Poco piu animato ホルンとファゴットなどの管楽器の持続音、そして主題提示とともに、弦楽器群が八分音符と三連符の対位的な動きを交錯させます。

第2変奏 Piu vivace 短調に転じ、よりテンポを速め、凜とした緊張感の中で音楽は進みます。

第3変奏 Con moto オーボエとファゴット、後にヴァイオリンが加わり、互いの応答の中で叙情的な雰囲気醸し出されます。

第4変奏 Andante con moto 再び短調となり、各楽器によって主題がカノン風に奏でられます。

第5変奏 Vivace 6/8拍子、スケルツォ風の音楽で、管楽器と弦楽器の絡み合いがスリリングです。

第6変奏 Vivace ホルンが主導した後、全楽器による活気あふれる音楽となります。

第7変奏 Grazioso イタリア語のgrazia(気品、情け)から派生した表情記号の通り、シチリアーノの6/8拍子のリズムに乗って優雅に上品にたゆとうごとき音楽です。

第8変奏 Presto non troppo テンポは速いながらも、ピアノ、ピアノニッモを基調とし、口ごもったような、はまた

ま沈静したような独特の雰囲気醸成されます。

終曲 Andante 変奏曲の最後を飾るこの終曲自体が変奏曲形式となっています。パッサカリアと呼ばれるバロック音楽の変奏形式で、最初にチェロとコントラバスによって奏される 5 小節の旋律

が全部で 19 回繰り返されます。この形式は交響曲第 4 番の終楽章でも採用しました。最後に主題が高らかに現れ、一瞬の落ち着きを見せた後、再び盛り上がり曲を閉じます。

(演奏時間：約 18 分)

A. ドヴォルザーク (1841~1904) 交響曲第 8 番 ト長調 作品 88

のっけから語学の授業のようで申し訳ありませんが、日本では「ドヴォルザーク」あるいは「ドボルザーク」という表記が一般的でしょう。しかし、チェコ語の発音からすると「ドヴォルジャーク」という方がより近く、もっとも原語に忠実にすると「ドヴォジャーク」。一番最後の表記・発音は、関連学会では「常識」だそうです。こうした「混乱」が起こるそもそもの原因は、彼の名前の 1 文字「r」（発音は「ジ」に近い）にあります。この文字は、他の言語圏の人々にとってもっとも発音しづらい音で、かつて同じ国家を形成していたお隣のスロヴァキアの人々（スロヴァキア語）ですら難しいそうです。ちなみに、チェコ語には英語と同じ「r」があり「ル」と発音します（解説子の言い分だけでは信用されそうもないので、大学の同僚でスラヴ語圏の言語文化研究が専門の教授に確認しましたので間違いありません）。なお、ここでは一般的な「ドヴォルザーク」の表記を用います。

次に、本日のプログラムの流れで、ブラームスつながりで話を進めますと、ドヴォルザークが作曲家として世に出る

ときのブラームスの援助が頭に浮かびます。

1875 年、ドヴォルザークは初めてオーストリア国家奨学金に応募し、400 グルデン（彼の当時の年俸は 126 グルデン）の賞金を獲得します。チェコの作曲家であるドヴォルザークがオーストリアの奨学金を得ることができたのは、当時、ハプスブルク帝国の版図にチェコのボヘミア地方やモラヴィア地方が含まれていたという社会的背景があったからです。このとき審査員に名を連ねていたブラームス、そして反ワグナーの急先鋒として名高い評論家ハンスリック（彼もプラハ出身）は彼の応募作品である交響曲第 3 番などを高く評価しました。ハンスリックは「毎年奨学金に応募してくる作曲家の大半は、若くて、貧しく、才能がある、という三つの条件のうち、最初の二つだけを兼ね備えているが、第三の条件を満たしている者は少ない。だが、ある日、アントン・ドヴォルザークというプラハからの応募者の、未だ荒削りではあるが大きな才能を感じさせる習作が、我々にうれしい驚きをもたらした」（クルト・ホノルカ『ドヴォルザ

ーク』音楽之友社より)と述べています。

そして、ブラームスは、ライブツィヒの有名な出版者フリッツ・ジムロック宛にドヴォルザークを推薦する手紙を書くほどまで肩入れをしました。これをきっかけに1878年、『モラヴィアの調べ』と題する作品がジムロック社から出版され、その後の彼の作曲家としての飛躍の基礎が作られ、生活の安定にも結びつきました。

少し時間をさかのぼってみれば、シューマンが、1853年10月、かつて主筆として健筆をふるっていた『新音楽時報』誌に久々に「新しい道」と題する評論を発表し、当時20歳のブラームスを熱烈に賞賛し、ブラームスの名を世間に知らしめることに一役買いました。そのブラームスが、才能ある若手に援助の手をさしのべる番になったわけです(ブラームスは他にも匿名で多くの若い音楽家を支援していました)。そして、時が下った1897年、今度はドヴォルザーク自身がオーストリア国家奨学金の審査員となります。自ら受けた恩を次の世代に返していくことが連続と続いているわけですね。

こうして世に出たドヴォルザークでしたが、彼は「遅咲き」の作曲家であったといえるでしょう。そもそも彼の人生設計と学業は、音楽とは全く関係のないところから始まります。12歳の時、ブラハ近郊の生地ネラホゼヴェスを離れて隣町ズロニツェに赴いたのも、父が営む家業の肉屋となるための修行と当時の国家体制のもとでは必須であったドイツ語の習得のためにドイツ系実業補習学校に通うことが目的でした。しかし、

生地の教会の少年聖歌隊やヴァイオリン演奏で音楽的才能を示し、その後さまざまな機会で楽器演奏と音楽理論の基礎を学ぶうちに音楽家になる思い断ちがたく、反対する父親を説き伏せブラハ・オルガン学校に入学し2年間の課程を修了します。しかし、音楽学校での評価も抜きん出たものではなく、作曲家として世に出るまでにはその後10年以上の時が必要でした。

その間、数多くの作品を作曲しましたが、ほとんどが公にされることはありませんでした。たとえば1865年(23歳)に作曲された交響曲第1番「ズロニツェの鐘」は彼の生前には演奏されませんでした。カレル・コムザークの楽団の“しがたないヴィオラ奏者”として糊口をしのぐような生活で、自分のためのピアノはおろか五線譜や楽譜を購入する余裕すらなかったといわれます。その後、国民劇場仮劇場のオーケストラにも加わったドヴォルザークは、チェコ国民オペラの嚆矢『売られた花嫁』の作曲者スメタナ自身の指揮による初演(1866年5月30日)にヴィオラ奏者として立ち会いました。チェコの国民音楽創造の大きなうねりが始まろうとしている時代の息吹を感じながら、1871年、作曲家としての活動に専念すべく、オーケストラを辞し、報酬は少ないながらも作曲のための時間をとることができる教会のオルガニストに移ります。このように雌伏の時を過ごしていたドヴォルザークの人生を変えていくのが、先述の国家奨学金の獲得、そしてブラームスとの出会いでした。

さて、ドヴォルザークは、喧噪渦巻く

都会よりも静かな自然が広がる田舎をこよなく愛し、田舎に別荘を建てるのが長年の夢でした。1884年、南ボヘミアの鉾山町ヴィソカーの羊小屋を購入・改装し、その夢は実現しました。以来、毎年春から秋にかけてこの地で過ごし、庭仕事に励み、鳩を飼育し、居酒屋での人々との気のおけない会話を楽しんだといわれるように、素朴な人柄でした（多少気難しいところもあったようですが）。そんなドヴォルザークの人となりを表わす一つのエピソードを。

彼は今で言う“鉄道オタク”でした。「機関車こそ人類最大の発明だ。私にこんな発明ができれば、今までに作曲した全部の交響曲と引き替えにしても惜しくはない」というほどでした。プラハの駅に日に一度は出かけ機関車を見るのが楽しみだったそうですが、ある日のこと、どうしても用事があって駅に行くことができない。そこで、作曲の弟子であり、長女オティリーエと結婚することになっていたヨゼフ・スーク（美しい弦楽セレナーデの他、名曲を多数生み出しました。チェコの名ヴァイオリニスト、ヨゼフ・スークはその孫にあたります）に機関車の型式や車体番号を控えてくるように命じます。スークは、先生であり、義理の父親になる人の頼みですから断るはずもなく、駅に出向き番号を控え、帰宅してドヴォルザークにメモを渡します。これを見たドヴォルザークは「馬鹿者！これは炭水車の番号だ！」と叱責したそうです。番号だけで機関車かそうでないか分かるとは“鉄道オタク”恐るべし！（我が家では息子が似たようなことをしていますが・・・）。返す刀で娘に

「こんな頼りない奴と結婚してはならん！」とのたもつたとか。楽しみを台無しにされた子どものような怒りとともに、「花嫁の父」の心境がかいま見えるかな？

お待たせしました。ようやく交響曲第8番の話題です。

この作品が生み出された時期、彼が民族主義をめぐる迷いを脱し、『レクイエム』や『ピアノ三重奏曲第4番《ドゥムキー》』などの名作を生み出し、創作力が一つの頂点に達していました。友人への手紙に「頭が音楽でいっぱいなのです。発想をそのまますぐに書き写せたらいいのにと、つくづく思います。でも、仕方がありません。たとえゆっくりであっても、手の動く限り、書き続けなくてはなりません」（クルト・ホノルカ前掲書より）と書いたほどです。言葉通り、この作品は、1889年8月26日にスケッチを始めてからわずか3ヶ月弱、同年11月8日に完成するという速筆でした。

作品出版の上で長い付き合いのあったジムロックとの支払金額をめぐる争いは、交響曲第7番（1875年出版）の頃から表面化していましたが、交響曲第8番では完全に決裂してしまいました。そして、1884年の初の訪英以来、知己を得ていたイギリスのノヴェロ社から出版され、その際「イギリス」という副題がつけられ、その呼称が長い間引き継がれていました（また、モノラルや初期のステレオ時代のLPレコードなどをひっくり返してみると「第4番」という表記になっています。これは実際の作曲順ではなく出版の都合上つけられた番号です。ちなみに有名な「新世界より」

は「第5番」でした)。この交響曲の内容から見たとき、イギリスとの関係はないと言ってよいのですが、ドヴォルザーク自身とイギリスの関係は、生涯での9回にわたる訪英のたびに熱烈な歓迎を受け、1891年、ケンブリッジ大学の名誉博士号授与の際には、授与式の前にロンドンでドヴォルザーク自身の指揮による交響曲第8番の演奏が行われるなど深いつながりを持っていました。彼がこの作品をノヴェロに渡した背景には、イギリスにおけるドヴォルザークの評価がたいへん高く、それゆえ金払いもよかったということもあったのでしょう(前記の「夢の別荘」の建設にあたって、最初の訪英で得た報酬は大きな資金となりました)。

古典的・伝統的な絶対音楽の形式を踏まえながらも、スラヴ的、チェコの民族色の特徴を余すところなく表現しているこの作品は、1892年、歴史に名を残す名指揮者ハンス・リヒター＝ウィーン・フィルが取り上げたことで世界に広まり、今日に至るまで、彼の円熟した芸術性を示すものとして評価されています。

第1楽章 Allegro con brio 短調と長

調の往復は全曲を通した特徴ですが、この楽章では冒頭、チェロ、ホルン、クラリネット、ファゴットが重なる響きが心地よい短調の美しいメロディ、続けて田園の小鳥のさえずりを連想させるト長調のフルートのメロディ。これらを素材に音楽は展開していきます。

第2楽章 Adagio 自由な三部形式。ときおり感情が激するような部分もありますが、静謐さの中に瞑想的な詩情あふれる楽章です。

第3楽章 Allegretto grazioso 三部形式のワルツ。ト短調の主題は、ブラームスが感嘆したドヴォルザークのメロディのセンスが満載。トリオ(ト長調)の主題は旧作のオペラ『頑固者たち』(1874)のアリアのメロディを流用しています。コーダは速度を上げます。

第4楽章 Allegro ma non troppo 自由な変奏曲形式。ファンファーレ風のトランペットで幕を開けた後、楽天的で質実剛健なチェコの民衆の活気を表象するような音楽がト長調とハ短調の往復の中で提示されます。ひとたび静まり、木管楽器と弦楽器の細やかな対話の後、ふたたび勢いづいて大団円へ。

(演奏時間：約35分)

